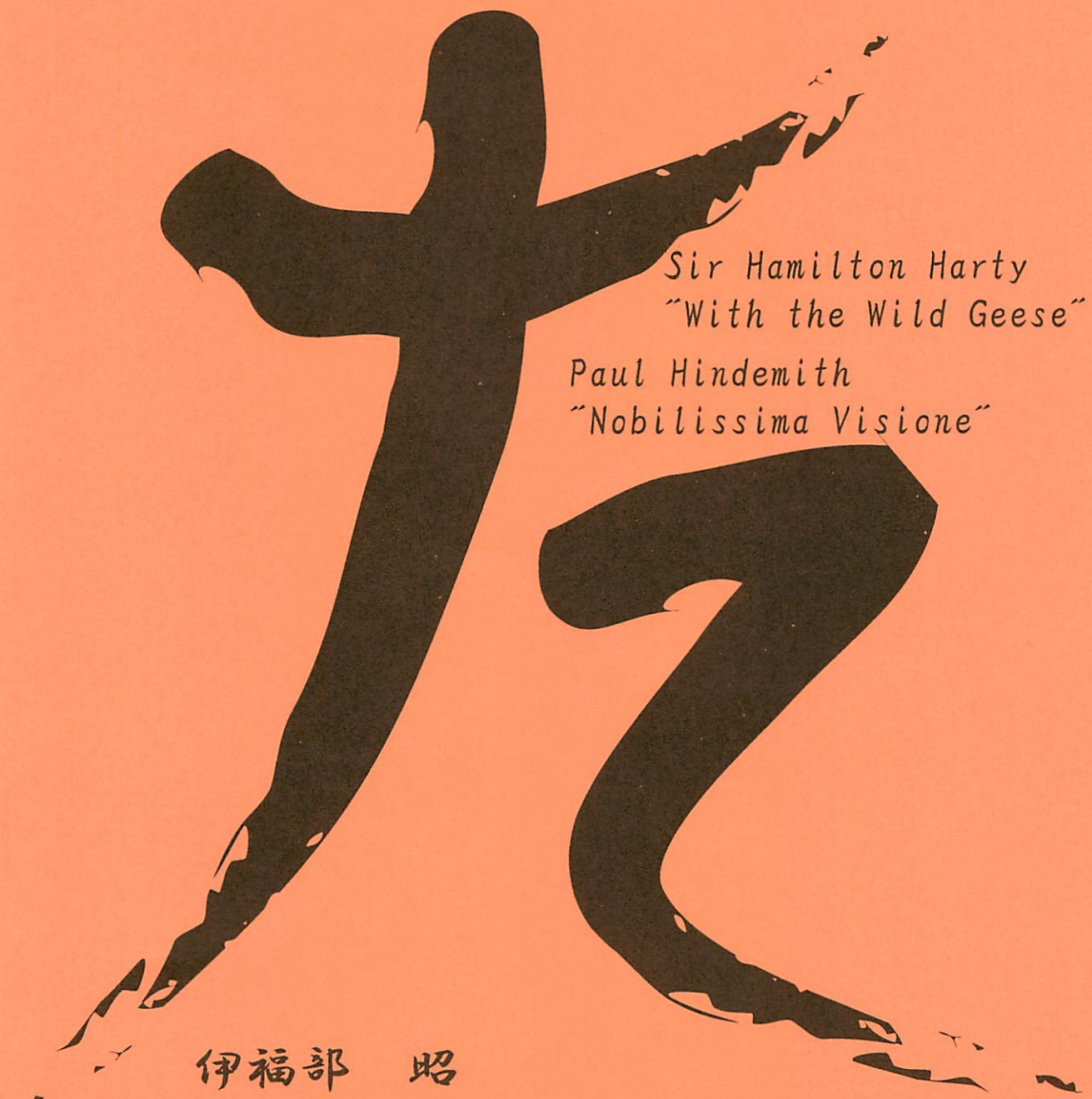
Philomusica Orchester Kyoto



Sir Hamilton Harty
"With the Wild Geese"

Paul Hindemith
"Nobilissima Visione"

伊福部　昭
"シンフォニア・タプカーラ"

京都フィロムジカ管弦楽団
第15回定期演奏会
2004年6月6日（日）
京都府長岡京記念文化会館

ごあいさつ

本日ここに「京都フィロムジカ管弦楽団」定期演奏会を開催するにあたり、ご多用にも拘わらず、多数の方々のご来場をいただきまして、誠にありがとうございます。

この定期演奏会も、各回毎に新しい音楽の創造に挑戦し、今年は第１５回目となりました。今回の演奏会は、指揮者に三原明人氏をお迎えし、先生のご指導のもと、努力と研鑽を積み重ね、本日ここに魅力あふれる曲の数々を披露してくれるものと期待致しております。皆様にはその努力の結実を演奏の中にお聴きいただければ幸甚に存じます。

また、この度は曲目も邦人作曲家作品をメインに、伊福部昭氏の“タプカーラ交響曲”が演奏される等、とても楽しみに致しております。

最後になりましたが、「京都フィロムジカ管弦楽団」の為に、物心両面にわたるご支援を賜りました皆様方をはじめ、ご指導下さいました先生方に厚く御礼申し上げますと共に、定期演奏会のますますの発展を祈りまして、ご挨拶とさせていただきます。

京都フィロムジカ管弦楽団顧問　　和田之宏

「私たち東洋人に西洋の音楽が本当に理解できるのだろうか」と問いかけた指揮者がいます。私たちの多くはこの国に生まれ、幼いころからこの国の文化を見聞き、体験してきています。これはちょうど西洋人が漢字を初めて目にしたとき、それが文字には到底見えないと感じるように、私たちにどうしても理解不能な部分があるのではないかということです。

このことは私たち団員がいつも考えていて、それならば自分の国の作品を深く掘り下げれば何かがみつかるのではないかと思い、二年に一度は邦人作曲家作品を取り上げることにしました。きょうは自分たちなりに作品と向き合い、各曲のちがいをうまく表現できればいいと思っています。どうぞ最後までお楽しみください。

京都フィロムジカ管弦楽団団長　　長岡武志

香雲
ミニコンサート in 大原
音楽と自然の音と朗読、
そして香りが織りなす
ヒーリング世界に皆様をお招きいたします。
企画／お問い合わせ先
プランニングオフィス　プロシップ
TEL/FAX:075-811-9120
http://www.pro-ship.com/

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ 輸入・販売・修理・調整　製作
イチイヒロキ Violin Shop
～弦楽器をもっと知り、楽しむ人に～
◆イタリア、ドイツ製ヴァイオリンなど直輸入、
品質には自信のある楽器や弓を良心的価格で揃えています。
まずは手にとって御試奏を。
◆弦は格安価格にて通信販売。ケースその他、特価品有り、
当店はただ売るだけでなく良いものをお奨めいたします。
楽器の音色の美しさ、するどさ、しなやかさ。表現の多様性から広がっていく音の世界。
イチイヒロキVolin Shopは より深みのある、新鮮な音を目指して、あなたをサポートします。
営業時間のお知らせ
pm. 1:00 ~ pm. 7:00
定休日（月・火）
◆ 〒602-0825 京都市上京区
寺町通今出川上ル長町31
◆ Tel: 075-251-0724
◆携帯電話：090-3628-0863
◆ e-mail: ichi@violinshop.jp
http://violinshop.jp

京都フィロムジカ管弦楽団　第15回定期演奏会

2004年6月6日（日）午後2時開演　京都府長岡京記念文化会館

— PROGRAM —

ハミルトン・ハーティ（1879－1941）／『雁の群れとともに』（日本初演）
Sir Hamilton HARTY　"WITH THE WILD GEESE" Poem for Orchestra
(Japan Premiere)

パウル・ヒンデミット（1895－1963）／組曲『至高の幻想』
Paul HINDEMITH　"Nobilissima Visione" Orchester-Suite
I．Einleitung und Rond　II．Marsch und Pastorale　III．Passacaglia

—休憩—

伊福部　昭（1914－）／シンフォニア・タプカーラ
IFUKUBE, Akira　Sinfonia Tapkaara　—To Mr. Atsushi MIURA—
I．Lento molto－Allegro－Andante cantando－Allegro　II．Adagio　III．Vivace

指揮　三原 明人

携帯電話･アラーム付腕時計など音の出る機器の電源は必ずお切りください。
客席での飲食･喫煙・写真撮影・録音･録画、上演中の私語は固くお断りいたします。

♪♪♪

ロビーコンサート　1:15より

サー・マルコム・アーノルド／フルート、オーボエ、クラリネットのためのディベルティメント Op. 37

1、Allegro energico　2、Languido　3、Vivace　4、Andantino　5、Maestoso　6、Piacevile

Fl. 加藤　Ob. 山出　Cl. 田中

･･･フィロムジカでは次回のエルガー1番に向け、イギリス人作曲家の作品を積極的に取り上げており、アーノルドも20世紀イギリスを代表する作曲家です。30代で作曲されたこの作品は1分程度の小曲から構成されており、6つの対照的な曲調をうまくミックスしたユーモアセンスあふれる小品です。トランペット吹き出身で豪快な曲調が得意というイメージのアーノルドですが、こういう曲も結構あるんですねぇ、実は。

ジュール・マスネ／歌劇「聖母」より、前奏曲「聖母の永眠」
ヨハン・セバスティアン・バッハ／「主よ人の望みよ喜びよ」

Vn. 天澤、越後、大八木、西村　Va. 小野田、篠崎　Vc. 小野田、小川、小松　Cb. 名坂

･･･木管アンサンブルの後は弦楽合奏曲をお送りします。今回は2曲用意しました。本プログラムは激しい曲調の作品が多いので、ロビーコンサートでしばし穏やかな時をお過ごしください。

♪♪♪

三原　明人（みはら　あきひと）

1961 年東京生まれ。ヴァイオリン、ピアノ、作曲を学び、東京芸術大学でヴィオラを専攻、その後桐朋学園、ウィーン国立音楽大学で指揮法を小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明、カール・エステルライヒャー、ヴァーツラフ・ノイマンの各氏に師事。さらにイタリア・シエナのキジアーナ音楽院、アッシジのレスピーギ音楽院のマスター・クラスにも参加、ゲンナジ・ロジェストヴェンスキー、モーシェ・アツモン各氏に師事した。

1989 年オランダで行われた「第２回キリル・コンドラシン国際青年指揮者コンクール」で第２位、1993 年ドイツ・ハレで開かれた若手指揮者養成のための”ＤＩＲＩGENTEN　FORUM”で最優秀ファイナリスト、1996 年ポルトガルで行われた「第８回リスボン国際青年指揮者コンクール」で第３位（１位なし）にそれぞれ入賞。

在学中より指揮活動を始め、またヴィオラ奏者としても活躍。1985 年ニューヨーク・カーネギー・ホール主催の現代日本作曲家コンサート、武満徹プロデュースの「ミュージック・トゥデイ」（銀座セゾン劇場）などに出演、また 1987 年のサイトウ・キネン・オーケストラ・メンバーとしてヨーロッパ公演に参加などしていたが、1989 年オランダ放送フィルを指揮してアムステルダムでデビュー以来、指揮活動に専念。1989／1990 のシーズン、ウィーン・フィルでレナード・バーンスタインのアシスタント、1991 年よりオペラ作品などで外山雄三、広上淳一各氏のアシスタント、また 1996 年ベルリン・フィル来日公演でクラウディオ・アバドのアシスタントを務めるなど研鑽を積みながらヨーロッパと日本を中心に各地で活躍。

これまでにオランダ放送フィルのほか、ドイツ・ハレ国立フィル、ブダペストMAV響、リスボン・メトロポリタン管、フィンランド・クオピオ響、ソフィア・フィルなど、また日本では東京都響、読売日響、日本フィル、東京フィル、札幌響、山形響、群馬響、神奈川フィル、名古屋フィル、大阪センチュリー響、広島響、オーケストラ・アンサンブル金沢、京都フィルなど各地に客演、コンサートやＴＶ・ラジオなどへの放送録音、ＣＤ・映画音楽制作など各方面から高い評価を得ている。また名古屋二期会でのモーツァルトの演奏会形式オペラ上演や、東京国際コンクール声楽部門優勝のアレクセイ・レプチンスキーのコンサートをサポートするなど、オペラの分野においても積極的に活動、1991 年には愛知県立芸術大学管弦楽団指揮者として後進の育成にも務めた。

1997 年フィンランド・クオピオ響を率いて来日公演を行い、１３曲にも及ぶオール・シベリウス・

プログラムを指揮して高く評価された。1998年にはブルガリアの名門ソフィア・フィルにデビュー、ベートーベン、ブラームスなどの作品でソフィアの聴衆を熱狂させた。

近年ではミサ曲、レクイエムなどの宗教作品やマーラーの声楽付き交響曲などに積極的に取り組み、また古巣のヴァイオリンに戻ってソナタやクァルテットなど室内楽の演奏活動も再開、その芸の幅をさらに広げつつある。現在作曲活動は休止状態にあるが、芸大在学中に作曲された「ヴィオラとオーケストラのための前奏曲（1983）」（同年作曲者独奏初演）は同年度の尾高賞作品と共にN響機関紙「フィルハーモニー」誌上で紹介された。

今後の活躍が大きく期待される指揮者の一人。

焼き肉の
三四郎
YAKINIKU NO SANSHIRO
長岡京市長岡1丁目1－12（駅前セブン通り右側すぐ）
TEL 075-954-3460　FAX 075-954-0346

ときめく出会い－湖西の自然
マキノ高原
みくに館（本館）
みくに館山の家（別館）
春から秋はテニス・各種合宿！
冬は目の前がマキノスキー場！
（京都東I.C.から車で75分）
〒520-1836
滋賀県高島郡マキノ町牧野
TEL&FAX　0740-27-1106（本館）
TEL&FAX　0740-27-1228（別館）

NET
合宿はもちろん、
ゼミ旅行や温泉に海外旅行
全てお任せ下さい
日本教育旅行株式会社
ﾌﾘｰﾀﾞｲﾔﾙ　0120-040-566
TEL.075-351-0405／FAX.075-371-7739
HP http://www.net-freeway.com
e-mail:mmtmk@rmail.plala.or.jp
担当者：美馬　智子

伊太利亜居酒家
たんとくわんと
Tanto Quanto
営業時間/PM5:00-AM0:00
（金・土・祝前/PM5:00-AM2:00）
京都市中京区木屋町三条下ル
TEL：231-2134

くすりの太陽堂グループ
舞鶴　宮津　小浜
事務局：舞鶴市字福来１１１１の２　TEL：０７７３（７７）２７１０

ハミルトン・ハーティ／「WITH THE WILD GEESE：雁の群れと共に」

ハーティ（Sir Hamilton Harty 1879-1941)はアイルランド人の作曲家です。ハーティは、イギリスに後期ロマン派のヨーロッパ音楽やシベリウス等の北欧音楽を指揮者として紹介したほか、ヘンデル等のバロック音楽を 20 世紀初頭のオーケストラの編成に編曲したことなどで知られています。そのほかピアニストやオルガニストとしても活躍しました。その結果、アイルランドの一作曲家としてのみならず、19 世紀後期にようやく花開いたイギリス音楽の先駆者としての地位を築きました。ハーティの音楽はアイルランド民謡などを積極的に取り入れ、民族的な色彩を帯びていて、アドリブ的なフレーズをちりばめた近現代のジャズを思わせる、当時としてはかなりアヴァンギャルドな作風です。

「With the Wild Geese」は、Emily Lawless(1845-1913)がフランスを舞台に繰り広げられた「フォンテーヌの戦い（1745)」の戦場における兵士達の心情を描いた、同名の詩をモチーフにしています。「Wild Geese」という言葉は、その「フォンテーヌの戦い」に先んじること約 50 年、イギリスのライムロックでフランスに大敗したアイルランド軍のうち、フランスに寝返ったり、敗戦の賠償としてフランス軍に譲り渡されたりしたアイルランド兵に対してつけられたあだ名です。５０年後、フランス軍の援軍としてイギリス連隊と敵対したアイルランド軍は、フランス軍の勝利を決定付ける重要な役割を演じ、名を上げた兵士達は母国アイルランドへ凱旋帰国しましたが、内心は複雑な気持ちであったことでしょう。現在でも、異国の地で命を落とした「Wild Geese」達は、地中から亡霊としてよみがえり海峡を渡って母国に帰ったと言い伝えられています。この「With the～（～と共に)」という題名には、「フォンテーヌの戦い」で命を落とした兵士と「Wild Geese」の亡霊が、生き残った兵士と一緒に母国へ凱旋するという意味が込められているのかもしれません。

曲中には戦いの場面や軍隊の行進曲に混ざって、雁の群れが湖面から飛び立つ情景を思わせるようなフレーズも登場し、戦争をテーマにした音楽としては非常に色彩豊かな作品に仕上がっています。

なお日本におけるハーティの作曲家としての知名度は低く、本作品も過去演奏された資料を見つけることができないため、本公演が、「With the Wild Geese」の日本初演である可能性は高いものと思われます。

参考文献　：NAXOS　CD 付属リーフレット　Peter Quinn 著
：ウェブサイト http://www.britishbattles.com
：Edwin F. Kalmus Conductor's Score 楽曲解説（著者不明）

（曲目推薦者：Vn.天澤天二郎）

ヒンデミット／組曲「至高の幻想」

パウル・ヒンデミット（1895～1963、ドイツ→スイス→アメリカ）は、マーラーやリヒャルト・シュトラウス以降、ドイツで最も偉大な作曲家の一人です。9 つのオペラ、6 つの交響曲をはじめ、多くの作品を遺しました。また、1956 年のウィーン・フィル初来日の際には、指揮者として同行、関西では宝塚大劇場で、この「至高の幻想」を指揮しています。

ヒンデミット自身、プロのヴィオラ奏者でもあったのですが、それ以外のあらゆる楽器も、一週間あれば完全に演奏できたほど、音楽的才能が優れていたといわれています。ヴィオラをはじめとした弦楽器や、ピアノやオルガンのための室内楽曲だけでなく、フルートからテューバ、サックスやギターに至るまでの様々な楽器のための、おびただしい数のソナタや小品や、声楽を用いた宗教的題材に基づく作品を書いています。

作風としては、調性にとらわれない響きや、長いフレーズを好んで用いていますが、例えば管弦楽曲においては、いたずらに規模を大きくすることはありませんでした。ほぼ同世代のストラヴィンスキーやショスタコーヴィチと同様、クールな作風が持ち味であるということが、この演奏をお聴きになってもお分かりいただけるでしょう。同じく同世代のシェーンベルクやウェーベルンのような分かりづらさはないのですが、ドイツ的な厳格さ、理屈っぽさは、バッハにも通ずるものであるといえるでしょう。

これもまた同じく、ヒンデミットと同世代であったドイツの大指揮者ヴィルヘルム・フルトヴェングラーは、彼の才能を非常に高く評価していた一人でした。もしあなたが、フルトヴェングラー自身が作曲した交響曲を聴けば、まるでブルックナーとヒンデミットが神様のもとで一つになって作曲したかのような錯覚さえ覚えることでしょう。

1933 年のヒトラー政権成立後、ヒンデミットのクールな作品はナチスより非ドイツ的であると見做され、公に弾劾されるに至りました。当時、フルトヴェングラーは、ベルリン国立歌劇場総監督の座を賭けて、新聞紙上でヒンデミットを擁護しました（ヒンデミット事件）。しかし、ヒンデミットは結局ドイツにとどまることができず、スイスを経てアメリカに移住しました。この「至高の幻想」は、スイス滞在中に作曲されたものです。

さて、「至高の幻想」は、イタリア中部のアッシジに生まれた宗教家である聖フランチェスコ（1181or1182～1226）を描いたバレエを、3 曲の管弦楽曲にまとめたものです。

フランチェスコは、若い頃は放蕩三昧でしたが、1206 年に聖書に目覚めました。彼の教えは非常に聖書に忠実であり、それ故にキリストと同様、異端として攻撃されたこともありましたが、その後現代に至るまで、彼の意思を継ぐカトリックのフランシスコ会は、全世界で活動を続けています。アメリカでフランシスコ会が地盤を築いた町が、サンフランシスコと呼ばれるようになったのは、よく知られる話です。

フランチェスコは、手足4か所とわき腹1か所、キリストが十字架に磔にされた時に打ち付けられた場所と同じところに傷跡があった（聖痕）と言われています。また、小鳥たちに神への賛美を説いた時、小鳥たちは一斉に飛び立って、空の上で十字架を描いたという伝説も残されています。

これらは、フランツ・リストやオリヴィエ・メシアンによっても音楽化されています。また、ゴールデンウィークに日本でも封切られ、話題になった映画「パッション」の監督メル・ギブソンに対し、フランシスコ会がフランチェスコの生涯の映画化を求めて署名活動を行なっているというのも、記憶に新しいところです。

第一曲「導入部とロンド」：中世の教会の中に歩んでいくような、ゆっくりと厳粛な雰囲気で曲は始まります。その後速度が速くなり、弦楽器の急速な上昇と下降、まずフルートによって提示されるロンド主題と、ところどころ織り交ぜられる、当時の教会音楽のようなフレーズが印象的です。

第二曲「行進曲と牧歌」：ピッコロとクラリネットにより、ユーモラスなマーチのテーマが提示されます。その後、弦楽器、金管楽器が加わり、クライマックスを形成した後、テンポは8分の3拍子に変わり、鋭い不協和音が炸裂する激しい場面となります。しかし、それもだんだんと静かになっていき、弦楽器と木管楽器によるたいへん穏やかな印象の音楽となります。

第三曲「パッサカリア」：バッハやブラームスが用いたパッサカリア（一つのテーマを繰り返す曲の形式）によるフィナーレです。はじめに金管楽器によって高らかに奏でられた6小節間のテーマが何度も何度も繰り返されながら、最後はこの上ないクライマックスを作りあげていきます。

作曲年代：1938年　初演：1939年
編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン 3、テューバ、ティンパニ、グロッケンシュピール、大太鼓、小太鼓、テナードラム、トライアングル、シンバル、小シンバル、弦楽五部

参考CD：入手しやすいものとして、クラウディオ・アバド指揮ベルリン・フィルのものがあります。ヒンデミットの作品の中ではこの曲よりよく知られている、交響曲「画家マティス」、「ウェーバーの主題による交響的変容」もカプリングされています。文句なしに抜群に上手いベルリン・フィルを、アバドが見事に鳴らしきった美しい演奏です。

逆に、ヒンデミットならではの厳格さを望むには、アバド／ベルリン・フィルの明るい響きよりも、旧東ドイツの名指揮者で、ベルリンの壁の崩壊後ピストル自殺を遂げたヘルベルト・ケーゲル指揮ドレスデン・フィルのものがよいでしょう。限定盤ゆえ入手しづらいかもしれませんが、妥協のない切れ味鋭い響きに驚嘆させられることでしょう。

（曲目推薦者：Trb.谷口佳隆）

伊福部　昭／シンフォニア・タプカーラ

最近、伊福部の著書『音楽入門』が復刻された（全音楽譜出版社、2003）。1951年に書かれた古い著でありながら、現代を予言するような鋭い批評が見られるのには驚かされる。僕がとりわけ共感したのは、機械文明が録音・再生の機器を生み出した結果「強制的に私たちの心境とはなんら関係のない音楽が、暴力的に私たちに朝から晩まで降りかかってくる」状況となり、「私たちは真の音楽を聴き分ける心と耳を失いつつある」とする指摘だ。この警告から半世紀たった今や音楽は、イヤフォンや携帯電話やパチンコ屋から漏れ聞こえる不快な騒音にまで堕してしまった感すらある。この著が書かれたわずか3年後に初演された「シンフォニア・タプカーラ」には、そうした音楽の危機的状況に対する若き伊福部の抵抗が表れていると見て間違いない。

タプカーラ交響曲に見られる伊福部の作風は極めてわかりやすい。その大きな特徴は「律動」にある。伊福部は、音楽はもともと踊り・詩・太鼓の音と一体だったのであり、その中でも音楽にあって最も本質的なものは「律動（リズム）」である、と述べている。「タプカーラ」とはアイヌ語で「踊る」という意味である。3楽章からなるこの交響曲の両端楽章は、大地を踏みしめるような力強く荒々しい踊りのリズムに支配されている。大編成のオーケストラと多数の打楽器が一斉に鳴り響く様は、太鼓を鳴らしながら群衆が踊り狂い叫び狂う荒々しい太古の祭りをイメージさせる。理屈抜きで人々に興奮と熱狂をもたらすものとしての音楽の根源的な力がここにはある。

この両端楽章に挟まれた第2楽章は対照的に律動感を排した静けさが支配する音楽である。踊りではなくむしろ詩をイメージさせ、悲しみのこもった子守唄のようにも、あるいは古老が歌う叙事詩のようにも聞こえる。性格を全く異にするこれらの楽章たちが、互いの個性を引き立て合う。

そして伊福部のもう一つの重要な作風は「民族性」である。伊福部は「自己の語法と様式」で作曲するという意味で民族性をとらえている。作曲者が音楽を書くときは、彼自身が最もよく理解し慣れ親しんだ音楽に立脚して書かなければ優れた作品を書くことはできない。そして、その最もよく理解し慣れ親しんだ音楽とは、その作曲者自身の民族の音楽なのである。

伊福部にとっての民族の音楽は、アイヌの音楽である。北海道に生まれ北海道帝国大学で林学を学んだ伊福部は、林野庁の技官として北海道内で青年期を過ごし、その中でアイヌ文化に親しんでいく。「タプカーラ」というアイヌ語の表題を持ったこの交響曲は、そうしたアイヌ文化を血と肉とする伊福部の個性が端的に表れている。この曲は特定のアイヌの民謡や舞曲を引用しているわけではないが、厳しい北の大地で精霊たちとともに生きるアイヌの力強さと美しさとを髣髴とさせる。

このように「律動」と「民族性」というわかりやすい個性を持ったタプカーラ交響曲には、理屈を越えた音楽の根源的な力がある。再生機器から垂れ流される音楽の洪水に受身になってきた我々現代人が忘れてしまっていた、音楽を聴く興奮が、ここには確かにある。

その一方で、構成は理詰めに計算されたものである。激しい舞曲風の両端楽章に静謐な第２楽章が挟まれたシンプルで且つ効果的な３楽章構成であり、さらに、荒々しい両端楽章の中にもゆったりとした音楽が挿入され、第１楽章の冒頭には悠然として悲劇的な序奏がつく。このようにして曲調を異にする音楽が次々と並列されることで、聴衆は時間の流れとともに繰り広げられる変化を楽しむことができる。また、激烈で舞曲調という共通性を持つ両端楽章にも、実は大きな個性の違いがある。第１楽章はめまぐるしい変拍子によって何度もブレーキがかけられる複雑な音楽なのに対し、第３楽章は４拍子のまま突き進むスピード感あふれる音楽でありフィナーレに相応しい。こうした見事な構成力、時間の経過の中での変化を楽しむ、という行為は、クラシック音楽を聴く醍醐味と言って良い。

音楽を聴く喜びを忘れてしまった現代人の心を、そのわかりやすく印象的な個性によって鷲掴みにし、さらに、構成と変化を楽しむというクラシック音楽の醍醐味をも体感させてくれる。シンフォニア・タプカーラはそのような作品である。音楽の危機と言える時代に投ぜられた渾身の力作である。

（Tp.遠藤啓輔）

京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

村上　治子様	渡辺　和美様	後藤　恭子様	井ノ山　敏江様	安藤　美知穂様
川野　浩之様	松村　里香様	高瀬　博章様	小林　香様	稲村　董雄様
岩佐　聖子様	松村　正人様	渡辺　一真様	杉本　幸子様	遠藤　時金様
田中　直子様	南方　一晃様	渡辺　由加理様	大原　達也様	瀬川　伸様
村山　義尚様	津田　篤太郎様	渡辺　晴菜様	石川　久男様	奈倉　道和様
村山　明日香様	越後　千代様	河上　由香里様	石川　佐知子様	福山　淑子様
渡辺　真人様	西山　恵子様	野瀬　規子様	山本　保子様	ほか９名様

2002年４月に発足しました「友の会」は，上記会員の皆様方よりご支援いただいております．（2004年５月現在）

京都フィロムジカ管弦楽団　Kyoto Philomusica Orchestra

Leaders
天澤　天二郎
(Harty, 伊福部)
大八木　文人
(Hindemith)

Violins
天澤　天二郎
飯島　光一朗
越後　美和
大八木　文人
奥田　美抄
小幡　拓也
川島　仁子
川島　武士
千熊　由紀子
中島　円
西村　浩輔
西村　祐司
水野　紗綾
溝渕　直美
飯田　俊也※
井村　有里※
大浦　一馬※
岡田　秋※
岡本　名那子※
粂田　昌宏※
高木　玲※
田代　直子※
柳橋　明果※
田原　靖子※
羽廣　忠彦※

Violas
小野田　靖代
篠崎　淳
下川　雅弘
松浦　淳司
中村　真央※
中　万起※
平石　美緒※

Violoncellos
小川　優香
小野田　税
小松　正明
奥田　真里恵※
田中　万帆※
星　衛※

Double Basses
河原　豊
名坂　美香
奥田　瞳※
塩谷　亮祐※
吉岡　佳名※

Flutes
江藤　佳美
加藤　勇仁

Piccolo
松村　朋美

Oboes
中西　充弥
山出　涼子
安原　由香梨※

Cor Anglais
崗崎　いつ子※

Clarinets
田中　慎一郎
萩原　潤
(Bass Clarinet)
酒井　朋美※

Bassoons
奥山　紀子※
林　直樹※

Double Bassoon
中田　毅※

Horns
芦原　俊平
片山　真吾
坂口　裕志
長岡　武志
安田　聖
吉野　文彦

Trumpets
遠藤　啓輔
竹内　恵理
中西　美智子

Trombones
谷口　佳隆
益田　繁幸
山下　大介

Tuba
塚田　淳一

Timpani
永野　貴子

Percussion
芦原　俊平
西村　浩
宮原　和男※
安岡　祐子※

Harp
神前　千草※

※印：客演奏者

顧問
和田　之宏

団長
長岡　武志

事務
木下　洋輔
西村　浩

弦トレーナー　吉野　美穂
京都市立芸大卒。ヴァイオリンを木村直子、岸辺百百雄、室内楽を種田直之、河野文昭、久合田緑の各氏に師事。

管トレーナー　山崎　雅夫
京都大卒。京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC.マクベス、A.ハーゼス、M.アンドレの各氏に師事。

印刷のことなら
大地社
〒602-0858
京都市上京区河原町通荒神口上ル二筋目東入ル
TEL (075) 231-1727㈹
FAX (075) 256-4604

花とコーヒー
カンパニュラ
Flower and Coffee
Open 8:30am-8:00pm
Holiday　Wednesday
Tel./Fax. 075-951-0362
長岡京市天神1丁目1-4 阪急長岡天神駅前

京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

第16回定期演奏会

2004年12月19日（日）　午後2時開演　　京都コンサートホール（大ホール）

シューベルト／交響曲ロ短調『未完成』

エルガー／交響曲第1番変イ長調

指揮：金子 建志

新入団員随時募集中

募集パート：ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス

オーボエ・クラリネット・ファゴット・トランペット・打楽器

※管・打楽器はオーディションがあります。

※コントラバスは団所有の楽器があるため、楽器に関しては相談に応じます。

詳しくはお問合せください。

Tel. 090-8163-4626（竹内）　　E-mail　philo_recruit@artdam.uji.kyoto.jp

「友の会」会員随時募集中

フィロムジカの活動を応援してくださる方を募集しています。

【年会費】1口　1,000円　　【期　間】ご入会いただいた月より1年間

【特　典】1．期間内の定期演奏会に、1口につき1名様を無料ご招待

2．その他演奏活動のご案内

3．定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せは、下記までお願いいたします。

Tel&Fax　075-495-1831（松村）　　E-mail　philo_tomo@artdam.uji.kyoto.jp

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ　　http://www.artdam.uji.kyoto.jp/philo/

クラシック音楽の海外公演・国際交流

海外での公演・国際交流は、現地でのマネジメントが大切です。
弊社は日本のオーケストラの海外公演・国際交流を、真の意味で成功させて参りました。
海外公演・国際交流のお手伝いはおまかせください。

最近の海外公演実績

岡山県桃太郎少年合唱団ドイツ公演98年8月（レーゲンスブルク大聖堂他）
京都市民管弦楽団ヨーロッパ公演99年5月（ウィーン・ムジークフェライン大ホール他）
彦根市ベルリン第九演奏会実行委員会99年12月31日（ベルリン・SFB放送大ホール）
ルーマニア トゥルグ・ムレシュ バッハ生誕200年記念コンサート2000年5月（文化宮殿）
同志社大学交響楽団ヨーロッパ公演2001年3月（グラーツ・ステファニーザール 他）
同志社大学交響楽団ヨーロッパ公演2004年3月（プラハ・ドヴォルザークホール）

ホームページ：http://www.mitsuma.com/
協力会社：ルフトハンザドイツ航空会社、全日空、JTB、近畿日本ツーリスト、AIU保険会社

(社)日本クラシック音楽事業協会会員
(株) ミツマ・ミュージックプロダクツ
〒605-0009 京都市東山区三条通大橋東入ル大橋町102 田中ビル5F　Tel.075-761-1213　Fax.075-752-5568